

会報
17号

函館の歴史的風土を守る会会報
No.17 S 59. 5. 26 発行
発行所 函館の歴史的風土を守る会
印刷所 双葉印刷所
電話 (0138) 53-7730

西部地区保全構想についての提言

会長 今田光夫

函館の西部地区について、2ヶ年にわたって「伝統的建造物群調査」が進められていたが、この程、北大工学部の足達富士夫教授らの手によって、元町、末広、弁天、彌生の各町にまたがる標題の保全構想がまとめられた。

周囲の環境と一体をして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いものを「伝統的建造物群」という。また、宿場町、城下町、農漁村など伝統的建造物群及びこれと一体をしてその価値を形成している環境を保存するために、市町村が都市計画内または条例によって定める地区を「伝統的建造物保存地区」という。文部大臣は、そのうち我が国にとってその価値が特に高いものを、「重要伝統的建造物群保存地区」に選定することができる。選定された地区については、市町村が行う保存措置に必要な経費の一部を補助することができる。また地区内の建築基準法の規制の緩和又は適用除外の措置がとられ、屋外広告物は屋外広告物法によって規制が可能となる。

函館の歴史は本州諸都市に比べればそれ程古くはないといつても、函館の都市形成の創りを、河野政通が宇須岸館に拠った享徳3年(1454年)にさかのぼれば、すでに530餘年を経ている。その間、道内・千島列はもとより、遠く樺太、東シベリア沿海のいろいろな異民族との接触があった。また、中世末期から近世に入ってはロシアをはじめ欧米諸国との交流が始まり、特異な文化を形成したことはすでに承知の通りである。この意味において足達報告が、函館の西部地区を「わが国の都市の近代化の特徴を端的に示している特異な歴史的都市」と位置付けているのは適切かつ妥当であり、「重要伝統的建造物群保存地区」に値す

るものと考えられる。

都市に機能性と快適性が求められるよう、西部地区とてその例外ではあり得ない。近代都市の一角にふさわしい再開発を望むものであるが、その要は、景観保持、修景努力、重要建造物の保存ならびにその周辺環境の整備などの調和に置かなければならぬであろう。

さらに具体的には、その住民が愛着をもちかつ誇りとする街なみであることを尊重して、住民との充分な協議検討を重ねて成案を得る努力を望みたい。所管は異なるが、目下進行中の湾岸道路あるいは緑の島の造成などが決められた経過を振り返って見れば、当時行政側は、世論を斟酌することなく、権力の魅惑に陥っての結果とも思われる。

西部地区の調査は、これまでしばしば行なわれたが、その結果は具体的に反映していない。この度の調査は、住民の将来の生活との関連の深いものであるから、報告内容を単なる調査結果に葬ることなく、むしろ勧告文として受けとめ、実現の方向に歩を進めることを願うものである。



函館の町並みを象徴する和洋折衷の家（弥生町）

—緒についた街並み論議—

北海道新聞社 記者 三 塚 昌 男

何か漠然としていた函館の街並み保存のイメージに、ようやく輪郭らしきものが浮かび上がって来た。函館市の委託で北大工学部の足達富士夫教授らが行った伝統的建造物群調査の報告書「函館市西部地区の町並み」の刊行。そして、建設省の委託で函館市が取り組んだ西部地区住環境整備調査の報告書刊行がそのイメージ提示の主役である。二つの報告書が描いているものは西部地区において考えられる街並み保存の理想形である。その理想形が本当にベストなのか、いかにして実行に移していくべきなのか、現実論としての函館の街並み論議はようやく緒についたところだといえよう。

足達教授による「函館市西部地区の町並み」では大胆な「西部地区保全構想」が打ち出された。大きな特徴は、各地で一般的な外観保存をあきらめ、原則として一般住宅の建て替えを図りながら景観を維持する方法を選択していることだ。それは西部地区の古い建物の防寒性能が悪く、居住環境としてふさわしくないからにはかならない。いくら歴史の香りがする建物でも窓からすきま風がビュービューと吹き込むようでは、寒冷地住宅が普及した現在、だれも好んで住みたいとは思わないのがふつうだろう。

保全構想はその上でいわゆる段階規制を提案している。「景観形成地区」は西部地区全域を対象とし、高さ規制と外観デザイン参考例の提示をする。「修景計画地区」は実質的な街並み保存地区であり、積極的なデザイン誘導を行う。「重要建造物」はできるだけ完全な外観保存を図るなどがその主な内容であり、報告書には各種の規制の具体的な線引きをした地図も添えられている。

段階規制が示された背景には、西部地区の面積が117ha(建設省の調査対象)と非常に広いことがある。異人館で有名な神戸の保存地区が9.3ha、他の市町村でもまちなかの一角を指定しているのに過ぎないところが多く、函館はその点非常に特異的だという。広い面積があるからこそ保存の価値があるともいえるが、半面、全体に配慮の行き届いた保存をするのに相当の苦労が伴うと思われる。これは余談だが、文化庁の補助事業としての伝統的建造物群調査はふつう一年間で済ませてしまう。ところが、函館はあまり

に面積が広いため、二年に分けて調査を行うという「特例措置」がとられたほどだ。

一方、建設省の西部地区住環境整備調査は、北大の足達教授らの指導を受けて行われたもので、「函館西部地区の町並み」と密接な関連性をもっている。ここでは、さらに大胆な街区改造、いわば外科手術の方針が打ち出されている。街区改造を行うのはもちろん住環境が非常に悪い地区に限定されているが、改造の手法として、強制事業を含む総合的な街区再編成を挙げている。これには相当の資金が必要になってくる。試算によると、権利者7人だけの共同建替え事業で鉄筋コンクリート二階建てのしゃれた建物をつくると事業費は8,000万円余りを要する。これをだれが、どう負担するのか、乗り越えていかなければならぬハードルはまだまだ多い。

ところで、函館市は本年度を「西部地区の街並み保存をどうするか、全局的なレベルで検討を加え、一定程度の方向を出していく年にする」としている。二つの調査報告書によって示された街並み保存の理想形にどうやって(どこまで?)現実的肉付きをしていくかがこれから行政の仕事である。この仕事にもっと市民を巻き込んでいく努力が必要なのではないだろうか。例えば一般市民が読んでもおもしろいと思われる「函館市西部地区の町並」を有料で配布するなど、やり方はいくらでもあると感じるのだが、どうだろう。

言うまでもなく、街並み保存の主役はその地域に実際に住んでいる市民たちであり、行政がいくらはやじたてようと、歴風会のような市民団体が研究を深めようと、その地域の市民が動かないことには何事も始らない。幸い、「函館市西部地区の町並」の住民意識調査によると、西部地区居住者の実に90%もが積極的な街並み保存が好ましいと考えている。だがこれは、現在の街並み論議が漠然としているがための「総論賛成」であると受け取るのがやはり正しいのではないか。そうでなければ、なぜその西部地区に廣告看板が無神経に乱立しているか、説明がつかないだろう。今後は各論の部分でも街並み論議がより活発に行われることを願っている。

くたばれ!!歴風会

~街づくり運動よどこえ行く~

医師 大河内 憲 司

函館の歴史的風土を守る会（以下、歴風会と略す）発足以来6年、その活動は、おなじみのチャリティパーティ、ふるさと写生野外展など多岐にわたっている。歴史的建造物や街並みの保存運動が、乱開発に対する反省から全国的に広がる兆しにあっただけに、歴風会の役割と運動は当初から注目され、実力以上に評価された向きもあるようだ。然し現在、全国の街づくり運動に取り組んでいる市民団体と比較して、その運動実績はどうであったろうか。発足当時その趣旨に賛同し参加した会員中、義理で入会した人、ニュース性に便乗した人たちは次第に落ちこぼれ、現存会員も会費納入だけの名目会員が多く、中心活動メンバーは10名にも満たぬ有様だ。従って会の活動行事が停滞しマンネリ化してくるのは必然である。会のこのような動脈硬化現象を救うには、新鮮な若者達の血が必要だが、会の目的、運動方針が今一つ不鮮明なこと、更に街づくり運動のあり方から離れて来ていることが隘路となっている。真に情熱を持った人材を求めるには、先ず会のあり方を根本的に問いかけてみる必要がある。

テクノポリス、連絡船問題、青函トンネル、緑の島、湾岸道路等々、いずれもこれからの函館の街づくりには欠かせぬ重要な問題である。然るに、旧函館郵便局舎の保存活性を求める北洋資料館問題の市民運動をはじめとして、前述の一連の事柄に対し会は、これ迄に一体どんな係わりを持って来たであろうか。

逆に出来るだけ係わり合いを避け、街づくりに最も重要な緊急課題から目を逸らし、問題解決のために学び動く努力も怠り、年中行事の消化でお茶を濁して来た数年ではないのか。それを問題視して歴風会の運動のあり方、体质を真剣に考え討議するという事もかつて無かったのである。歴風会は確かに、旧渡島支庁舎保存問題以後、一応の市民権を得たかに見える。然しその実体は、真に街づくりに取り組む姿勢が年々希薄となり、虚名に安住し単なる陳情団体、仲よしクラブとなっている。歴風会は、函館の郷土史研究会でもなければ建物の勉強会でもない。表面的な言葉だけで建物を守れ修復せよと言ってみても駄目だ。実行力を伴なわぬ提言は空虚で真実味がない。会の提案に耳を傾けてもらうには、歴風会自体が街並み保全の確固たる理論と実践に裏打ちされた実力を持っていなければならぬ。函館の街づくりのために、会員自らが学び自らが積極的に参加し、本来の街づくり運動から外れた会の軌道を早急に修正し、進むべき道を確立することが歴風会生き残りの唯一の道である。いつ迄も「函館の歴史的風土」を学び、知らせ、守ろう』でもあるまい。『……』を育て、創り、伝えよう』でなければ

ればなるまい。

さて話は変わる。本年2月発行の歴風会会報に「新春座談会」なる文が掲載された。切花亭、亭主万俵などふざけた名を用い、おまけにアルコール入りだから不正確と、ごていねいな断わり書き、その内容たるや伝聞、推測をもとに個人批判しているのだから、なお始末が悪い。こんな無責任な文章を載せた会の責任者、編集者の意図と見識を疑うが、ユニオン・スクエアの問題で私を酒の肴にしている事だし又、歴風会と旧函館郵便局舎は無縁ではないので、ひと言触れておく。

ユニオン・スクエア倒産事件に就ては、複雑な経緯と事情があり、外部の者にはその真相など到底分る筈もない。当事者の一人たる私が現時点で真相を語る事は、種々な波紋を周囲に投げかけるので、或る時期迄は差し控えることとしよう。ところで、旧函館郵便局舎再生のため純粹に取り組んだ人間に対し、結果はどうであれ、「無茶な思いあがり」と断するだけの見識や偉さを持つ人間が一体どこにいるというのだろうか。そう言う人間こそ思いあがりも甚しい。自分は何等手を染めず、高見の見物としゃれこんでいる無責任な者のたわごとに過ぎない。旨くゆけばそれでよし、失敗すればそれまたことかと人を嘲笑、批判する輩で、これほど気楽で狡猾な人種もない。

昨年12月、街並み保存再生の象徴的存在とされた「ユニオン・スクエア」が破綻するや、慾望むき出しの利権屋や整理屋が、この建物にハイエナの如く群がった。斯くて当初、この建物に込められた街づくりの精神と思想は、一挙に慾望という名の泥靴に踏みにじられてしまった。未だに関係者が望みをかけている再建案も、何故か、建物所有者の協力が得られず絶望的。その一方でいつの間にか、ユニオン・スクエアは勝手に明治館と改称され、西部地区活性化に燃えたテナントの若者達の想いも、ドロドロした強慾のるつぼの中に投げ込まれてしまった。すべては『カネこそ力』の論理が全てを支配し、そこには文化の香りや街づくりの理念など一かけらも見られない。この倒産事件の陰でソロバンをはじいているのは誰か。そして最後に笑うのは誰か…。ユニオン・スクエアが泥にまみれて野たれ死にするのを、我々は手を拱まねき黙って見守るしかないのか。

悪徳な経済行為が一方的に文化を押し潰していく。文化は「こころ」だ。こころを失なった人間どもが寄ってたかって喰い物にしようとする旧函館郵便局舎は今や何の価値もない『ボロ屋』に朽ち果てた、函館西部地区活性化の先がけは見事に、うたかたの夢と終ったのである。精神滅びて建物残る…………か。

函館ゆかりの二人の外国人

T·W·ブラキストン

南北海道自然保護協会会長
函館植物研究会会長

宗像英雄

彼は、陸軍少佐ジョン・ブラキストンの次男として誕生。クリミヤ戦争に出征後、北米探険隊に参加。大尉に昇進して広東守備隊長に任官。1861年2月から7月にかけて、当時の欧米では不明の地とされていた揚子江上流地域を探険、詳細な報告書がロイヤルメダルを受賞する。その報文は探険から帰任するや、炎暑をさけて直ちに執筆しようと、商船エヴァ号に便乗して函館へ来航、10月末のエヴァ号再航まで3カ月間に函館において書き上げたものである。

1863年、軍籍を離れて西太平洋商会の代理店開設のため、夫人を伴いシベリアを横断して再び来函。翌年、商会のアキンド号で技師ジエームスと大量の資材到着、直ちに製材事業を開始、かくして20年にわたる函館での大活躍がはじまるわけである。

実業家として函館の近代化に貢献した業績はよく知られているので、探険家、鳥類学者としての一面に少しふれたい。軍人時代の幾度かの探険に加えて、彼の足跡は遠く道北道東から千島にまで及び、詳細な人情視察はもとより、地形や植生、特に野鳥には鋭い眼を向け、鳥類学界に幾篇もの論文を提出している。生物地理学上のブラキストン線もその集積に立つものである。1880年、鳥類に関する研究をアジア協会に報告、その中で津軽海峡の境界説を発表したが何の反響もなく、ただ座長を務めた工務大学教授ダイバースから詳しい論文の再提出をうながされ、それが離函の年1883年2月の「大陸と日本列島の古代における連けいを示す動物学上の徵候」という境界説を主題とした論文の発表となった。

実業家としての彼は、激動する世相や明治政府の圧迫などにもよるが、事業の大半は成功には至らず、遂に商人とはなりえなかった。彼は矢張り根っからの探検家、自然学者であったのではなかろうか。

K·I·マクシモウイッチ

1927年、北大を会場に、宮部博士の主宰により「マクシモウイッチ生誕百年祭」が盛大に催された。席上、宮部氏はマ氏を「東亜植物学の父」と称え、「マ氏の研究は精緻を極め、後進の徒の歩むに道は平坦なり」と賛辞を捧げた。館脇博士は「マ氏により日本植物の20分の1が科学的地位を与えられた」とその業績を称賛した。日本の植物約6,000種のうち約300種がマ氏により命名されたからである。また、

1960年、菅原繁蔵氏はマ氏函館上陸百年を記念して「マ氏小伝」を出版した。

近代日本植物学の黎明期に活躍した多くの学者達はマ氏に標本を送って指導を受けた。宮部氏のごときはマ氏宅に寄寓して学び、牧野博士はマ氏を慕って日本脱出を企てたほどである。

ドルバット大学(現タルトウ大学)でブンゲ教授に植物学を学んだマー氏は、1853年、26才にして世界周航船ディアナ号に乗組み、翌年デイカストリー港で下船し黒竜江地方の植生を探査。帰国後、「アムール地方植物誌」の発表によりデミドフ科学賞を受賞、直ちに再度の東亜調査行に出発、陸路ウラジワスクに到着したのが1860年。ここで、ガローニンの「日本幽囚記」により深い関心を寄せていた函館の開港を知り、大陸と日本列島の植生の関連を解明するよい機会と、巡洋艦グリーデンに便乗して函館に入港したのがその年の9月18日である。

滞在1年2ヶ月、使丁長之助を函館山で教育、優秀な助手に仕立て上げ、函館周辺の植生を探査した。横浜、長崎を経て帰国後も長之助の送り届ける日本各地の標本を精査し、その成果を1891年に死に至るまで発表し続けた。マ氏と長之助の不屈の活躍がなかったら、日本植物学の近代化は半世紀の後れをみたことだろうとさえいわれている。



ミヤマエンレイソウ

別名：シロバナエンレイソウ

学名：トリリュウム・チョウノスキー・マキシム

市街地の拡大と水

ー上水道のできるまでー

函館北高教諭 佐々木 正明

歴風会の会員で同僚でもある高瀬さんから地理的な観点で何か話してくれないかという依頼がありました。私には蓄積されたものが何一つありませんでしたので、この機会に水道ができるまで、どのようにして水を得ていたのか調べてみようと考えて引受けたわけです。函館区史、函館の歴史等を読むことからはじめ、そのなかでの疑問点については、図書館の資料室田中係長さんに御教示をいただきました。勉強会では市街地の拡大の様子についてスライドを写しながら説明しましたが、枚数の関係で省略し、水についてのみ記すことにしました。

享和3(1803)年に箱館奉行の役宅が竣工し、その際に井戸を掘ったが大きな石が多く、ようやく一個掘りあても用をたすものにはならなかった。それで富山元十郎という調役が、護国神社の裏山に清泉を見つけ、寛で水を官舎や付近の民家にひいた。これを

“富山泉”と云う。文化3(1806)年に箱館の町は大火にあい、街の半分近くが焼けた。この事を聞いた勘定奉行石川忠房が、見舞金として十両を送ってきたので、その一部を基金として箱館奉行羽太正養、戸川安論の協力により大町に井戸を掘った。地中の巨石に穴を開けたところ清泉がでて止まらず、数多くの寛をとりつけ近所数十軒にひいた。三人の協力によるものということで“鼎泉”と称した。安政年間の頃には、砂頸部では豊川町の一部を除けば他に市街地がなかった。これは清水に乏しいことと湿地が多かったことによる。高田屋が大阪から職人を連れてきて十字街警察官派出所付近に井戸を掘らせ、近くの住民が争ってこれを利用した。亀田川の水を堀を掘ってひくことを考えたのが、願乗寺の憎堀川乗経であった。当時の亀田川は、鍛冶橋付近から亀田八幡宮をとおって拓銀万代町支店近くで函館港に注いでいた。しかし、氾濫する度に農民に大きな被害をもたらし、その上港に注

上 水 道

亀田村赤川水源の上水道利用計画は、明治6年旧弘前藩士で、のちに青森市の合浦公園創設者となつた水原衛作が開拓使に請願しているが、明治12年開拓使は米国人雇土木技師クロホードと、御用係の松本荘一郎に命じ、函館水道敷設の調査をさせた。明治20年北海道庁は横浜上水道を担当した神奈川県土木技師の英国人パーマに委託して再調査し、同21年6月工学博士平井晴二郎の手により赤川からの敷設工事を起工した。工事は翌22年12月完成したが、同年9月20日函館公園で盛大な通水式を行なった。工事報告書によれば、作業日数390日余、作業員延52,800人余、鉄管大小20,000本、延長16km、給水人口60,000人となっている。

わが国では横浜に次いで2番目の水道敷設であるが、日本人の手で完成した最初のものとして知られる。

= 目で見る函館のうつりかわりより =

「女性の多情さがフランスの源を生んだ……」!?

=中世城壁都市ナント市をたずねて=

フランスウィーク実行委員長
歴風会運営委員

佐渡谷 安津雄

この1月6日から8日まで、函館の市民文化を通じての、ニース市民との交流日程を成功裡に終え、パリからジェット機で50分、ナント市に着いたのは1月9日の昼近でした。ナント仏日協会会长クロード・ブリアンチ氏の出迎えを受け、ナント旧市街（現在も中心地）へ案内されました。

真冬とは言え、函館の11月のもやのかかった朝の様な、やわらかい陽しが町全体を包みこみ、公園の裸の木々は、やさしい影を長く落していました。中世の城壁や石の建物達は、それら様々の光や影の中に静かに息をひそめている……。そんな風景の中で数百年も前の時代に何の恐れもなく吸い込まれ行く様な感動にかられました。

「ナント」についての私の知識は「ナントの勅令」について、わずかに知るのみでしたが、なにもかもが新鮮に生きいきと語りかけてくるのでした。

ナント市は16世紀までは、フランスとは別の国、ケルト民族の自治国として、ロワール河口とエルドル川の合流点にできた二つの島を中心に、海洋貿易の要として発展した商業都市だそうです。（現在人口40万人）

イタリア遠征により、フランスにルネッサンスをもたらしたシャルル8世とナントのアンヌ王女の政略的結婚（アンヌは3度目の結婚）により、ナントとフランスの合併が始まります。そしてアンリ4世は「ナントの勅令」（1598年）によって、新旧キリスト教会の対立の解決をはかり、信仰の自由を認めることにより、フランスの統一が進みます。

「女性の多情さがフランスの源を生んだ……。」のガイドさんの話には、フランス人らしいウイットと共に

に、フランスの歴史に対するナント市民の高い誇りが感じられる様でした。

中世からのたどづまいが生き続ける街ナントは、18世紀初めに、法律・経済学者のグラランという人によって都市計画が指導され、その理念が今日まで受け継がれている

との事です。ヨーロッパで最も美しいと言われるアンリ4世ホテルは、グラランの設計によるものとの事、高さが統一され広場をかこむ石造建造物は、今日も商店として市民生活に結びつき、200～300年の歴史をもつレストランもあり、19世紀末には細い路地をはさむ建物間が石のアーケードで結ばれ一つの大きな建物として商店街がつくられ、それは100年以上も楽しいショッピングアーケードとしてナント市民に愛され続けています。

中世のお城は、ナント港にちなんで船の歴史館として再利用され、ナント自然博物館は、旧造幣局、等、中世の落ちつきの中に、現代ナント市民の確かな息づかいを感じる素晴らしい都市でした。

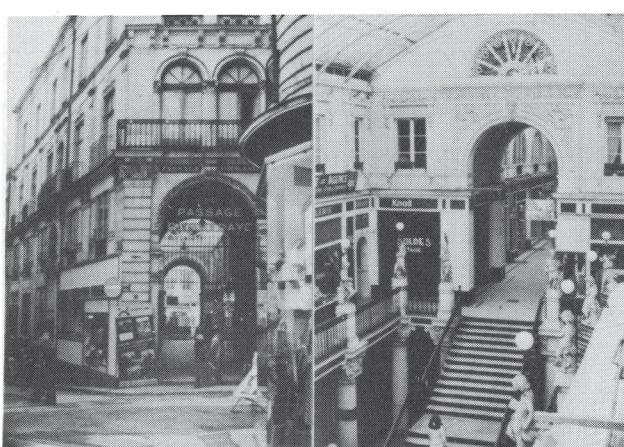
今、ナント市は、ほぼ130年前日本の他都市に先がけ仏艦シヴィル号の寄港を通じて、日仏親善をはたした函館市と姉妹関係を結びたいと強い要望をもっています。わが歴風会としてもナント市民との交流を深めたら……。と考えますが、いかがでしょうか。

私達を心よく迎えてくれたナント市民の代表として、助役さんの言葉が印象的でした。

「私達ナント市民の活動のすべては、先人達の遺産を正しく受け継ぎ、今日に生きる市民一人一人の快適な生活を造るために、それらを統一し、活用するという基本にもとづいている。」……と。



サン・ニコラ広場

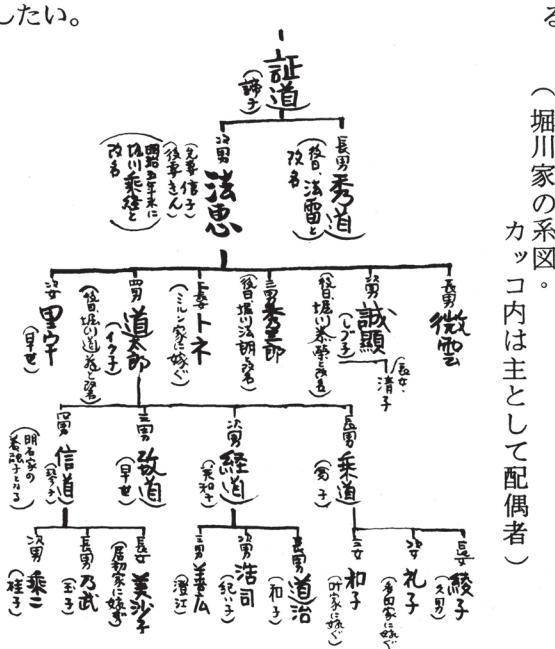


PASSAGE POMMERAYE

願乗寺と願乗寺川(一)

早稲田大学名誉教授 明石信道

大門前の高砂通りの舗道に立っていた私にリックを背負った一青年が「願乗寺川というのは何処か、願乗寺という寺は……」と尋ねられたことを覚えている。「君の立っている辺りが昔の願乗寺川の在った所、この通りの突当りの奥の方に西別院という寺がある。それが願乗寺の跡……さ」と答えた。これと同じような質問を二度か三度うけた。おそらく須藤隆仙氏や故神山茂氏また近江幸雄氏など多くの諸氏の記事を読まれての旅の人が探索されているのだろう。祖父法恵(明治5年末に堀川乗経と改名)に就いては少年の頃から両親の話で知り、法恵の偉業に年をとると共に心がひきしめられた。実兄堀川乗道の死後(昭和27年)長女綾子から願乗寺関係書類を渡され、その中に法恵の次男誠顕(後日恭栄と改名)の記した「本願寺別院創立の原由と堀川乗経履歴(明治13年上梓)」及び「真宗本願寺掛所願乗寺明細帳」の2部があった。その他郷土史家、宗教研究者の諸著作など参照して、改めて祖父法恵の並々ならぬ努力の跡を公表する次第になった。渡された書類は全部と称しても少し散失があるようだ。いろいろと人物が登場するので一応系図を掲げて参考に供したい。



法恵の父は(青森県)陸奥国下北郡(田名部郡と自らは記している)川内村願乗寺5世住職の証道、母は諦子。法恵は両親の二男であった。文政7年(1824)4月4日に生れた。兄は秀道(後に法雷と改名)。法恵は安政二年に、兄の秀道は安政3年に京都本山で得度をしていた。法恵は7歳、天保2年(1831)に父の願乗寺証道は入寂し、その後母一人に育てられた。農

夫や漁夫でも二男とか三男は他家の養子になるか離郷して家を興すかが日本の慣習で、法恵は次男としての覚悟は芽ばえていたらしい。誠顕の手になる履歴には長ずるに従って下北半島の各地を遍歴したと記されている。西の近村の法事に席をしたり、次は南に託鉢をする行動を兄秀道と共に続けたものだろう。私の母に誠懸の語るところによれば法恵は常に寡言であって決断に迷わず行動は敏であったし、心に何か期していたような人であったという。その頃、下北半島は「陸の孤島」といわれていたが、海運は早くから盛んで沿岸の田名部七港が開かれ、回船問屋が建ち並び蝦夷と関西とも交易があったから、時折の会話の中から法恵の耳に鮑漁や出稼人の往来の激しさなど入っていたらしい。法恵の心は北に北に動いていた。法恵が下北の願乗寺を去り蝦夷地に新天地を見出す記述の前に二、三の事情を概略ながら記したい。ここで松前史年表の天保年間の家記を参照すれば、天保5年(1834)に藩主章広は歿し、12月に松前良広が家督相続し、この年に藩貯穀の法を設けた。なお新撰道史によれば飢民内地より続々西蝦夷地に移住するもの多しとの記事がある。天保7年(1836)は全国的大飢饉、奥羽地方最も

甚だしく、死者10万。松前藩では蓄米、乾魚を領民に与え貧民を救済したという。南部の流民は松前に多く渡った(家記による)。東北の冷害は現代でも問題視されていて、当時としては想像以上の災害であったろう。法恵は少年時代にこれを味って新開地に挺身しようとしたと信念をかためたと思う。

法恵が蝦夷地に於て活動する前に読者に同じ浄土真宗ながら何故「お西」とか「お東」と分裂しているかを予備知識として語りたい。この分裂はいろいろ憶説はあるが、織田信長対本願寺の争いからいわなければならない。信長は天正10年(1582)に本能寺の変で死歿し主権は豊臣秀吉の手に移った。その機に本願寺と秀吉との関係は開かれ、翌年頼如が鷹森を去り大阪の和泉貝塚に移ってから両者の交渉は一層密になった。貝塚の寺地は狭く天正13年(1585)に秀吉は大阪天満に寺地を与えて本願寺を移転せしめた。天満の建築工事は早く進捗し、阿彌陀堂は先に竣工し、翌年御影堂が完成し、早急の工事ながら規模は石山よりもはるかに広かったという。天満移転の後に頼如は大僧正に任せられたが、真宗に於いて大僧正になられたのはこれが初めて、爾後本願寺歴代の先例と

なったのである。翌年顕如はこれを辞退したという。かくて天満本願寺の基礎は次第に定まりつつあったが天正19年（1591）に正月に至り、突如門徒の要望により本願寺の京都移転を決定した。秀吉は正月に京都六条に約10万坪の地を本願寺に寄進した。現在の本願寺がそれである。同年に御影堂が移建され続いて阿彌堂が新築され、次いで対面所、諸門、鐘楼、茶所が竣工した。これで京都本願寺全貌は成就したのであった。文禄元年（1598）に顕如は50歳で歿した。

その長男教如は早くから嗣法として選ばれていたが、石山退去以来一身に問題があった。石山戦争の講和に当り、顕如は勅を奉じて大阪に退去したが、教如は信長の態度に危惧を抱き退去を肯んせず、門末に檄して再び籠城したため、門徒は顕如と教如の両派に分れたのであった。この教如もつまるところは鷺森を退いたが教如は父から義絶された。信長歿後に義絶は解かれたが教如は依然不遇であった。しかるに顕如が歿すると教如は直に第12世の伝灯を継ぎ石山の同志84余人を坊官、堂衆等に登用した。これは石山以来の盟約によるという。当時秀吉は朝鮮征伐のため福岡県の名護屋の陣営にあって顕如の逝去を知ると教如の繼職を認めたが、翌年秀吉が大阪に帰り顕如の室如春尼から前後の事情を聞き、ことに天正15年（1587）顕如が准如（第三男）のために記された譲状のあることを知ると秀吉は教如を説いて譲歩を求めたのである。教如は容易に応ぜず、秀吉は退職裁決を与え、准如をして第12世の伝灯を継がしめた。ここに教如は北殿に隠退して裏方とよばれたのである。

その後豊臣氏に代って徳川家康に政権が移ると教如は次第に徳川に接近し、慶長5年（1600）関ヶ原の役が終ると、教如は家康に苦衷を訴え、家康は翌々年鳥丸七条の地を教如に与えた。そこに成立したのが「お東」とよばれる浄土真宗大谷派本願寺である。しかし教

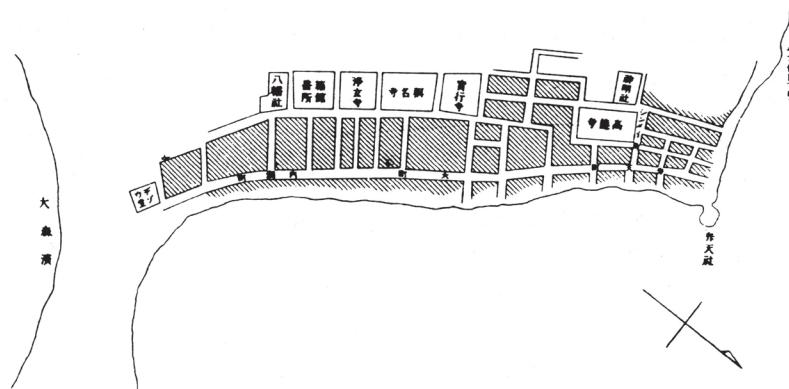
如は本願寺裏方として生涯を終えたので、東本願寺が幕府から独立の一派として取扱われたのは次の宣如の時代である。要は石山終戦以来宗門は顕如と教如の二派に分かれたのが原因であった（宮崎円遵説による）。しかし筆者は東本願寺（大谷派）の徳川期に於ける積極的行動について関係の事項を語らなければならない。源了円著の徳川思想史によれば……家康、ならびに幕府の対仏教政策は複雑巧妙であった。家康は若い頃、その領地におこった一向一揆に苦しめられた苦い経験をもち、また石山本願寺にほとほと手をやいた信長を観察し、宗教勢力を正面から敵にまわすことは政治家として賢明でない。そこで彼は門徒制度などによって仏教を經濟的に保護しつつ、他宗に対する伝道の自由を認めないという方法で宗教的生命を奪った。本寺と末寺の関係を厳しく統制して教団支配を容易にし、他方また朝廷と仏教々団との関係を断ちきって、朝廷の勢力を間接的に弱めた。この經緯に於てとくに重要な歴史的意味をもつのは、第一に真宗における宗教的生命の弱化と第二には政治権力に徹底的に妥協しなかった日蓮宗への弾圧であろう。真宗はすでに覚如以来、その教団としての性格は変えていたが、自分は一人も弟子をもたない、すべてが御同行であり、御同朋であるとする親鸞の教えは封建的支配関係からなる社会構造への批判的契機を潜在的にはその後ももち続けていたのである。話はやゝ本願寺の来歴から分裂と徳川幕府思想史まで入ってしまった。この先は読者の研究と判断にまかせよう。法惠は下北半島の荒涼と不作に悩まされながら一般庶民の談話を耳に入れるたびごとに機あらば蝦夷に渡り布教の道を擧げようと心に深く決めていたと思う。天保12年（1841）といえば法惠16歳のときであった。箱館に船出する回船問屋の帆船の一隅に僅かながらの路銭をもって箱館の港に入った。蝦夷地に第一步を印したのであった。



（寛政11年（1799）～文化九年（1812）の間に函館市現市文況図書館所蔵）

ここに寛政11年から嘉永7年までの二つの図（「はこだての文化財・函館市文化財保護協会より転載・原図は函館市図書館所蔵のもの」）を掲げた。高龍寺・实行寺・称名寺・淨玄寺は早くから建立され、坂道は享和より嘉永に至る時代の移りで整頓され、亀田番所から箱館番所になり御役所屋敷へ移変しているが57年間の時代にしては余り変化がない。法惠は箱館山の西寄り山麓の通称寺町通りを歩き「何故、西派の本派本願寺がないのか、……この地に願乗寺を建てよう。川内

村のものを移すか、否、願乗寺を新しく建てよう」「箱館番所か役所に訊ねようか」「それより福山の専念寺をたずねよう」とあせるなど心を静めて船によって小樽にゆき、健脚にまかせて札幌まで踏破したのであった。法惠の胸中には箱館に限らず蝦夷全域の布教を考え、寺宇を建てるには、開墾、開拓の重要性を感じたのである。青年僧の気字雄大で誠願の履歴には「この踏破に二ヶ年有余を要した」と記されてある。



享和年間（1801～1803）の箱館市街図（はこだての文化財・函館市図書館所蔵より転載）

ここで読者に「はこだて文化財一函館市文化保護協会」の6頁と7頁の挿絵を見て載こう。現在の二十軒坂の大谷派別院の淨玄寺は現在の弥生小学校の位置に建てられ、それから右に浄土宗の称名寺、日蓮宗の实行寺が並び、高龍寺は現在の位置でなく、少し離れて弁天に建てられてあった。とにかく「寺町通り」といわれるほど寺刹は軒を並べ町筋をつくってあった。坂道は享和から嘉永に至る57年間というものは火災のある度毎に整頓され、寺院は時代の波を乗り越えて不動の位置を占めていた。天保12年に僧法惠は箱館の西寄りの山麓の寺々を見ながら考えたことを宿の者に「箱館には西派の門徒はいないのか……」と訊ねた。「それはいますよ。たしか国領のダンナが……そうだ。」という答。享和（1801～1803）の地図には弁天町・大町・内潤町より町名は見られない。天明5年（1785）の頃は福山（松前）は戸数約1500戸、江指は約1000戸、箱館の戸数は約400戸で人口2200人であったから（箱館区史）、町より村といった方が適していたのかもしれない。法惠は大町、弁天の住民を個々に訊ねて、漸く國領平七なる人に会うことができた。正しく西派の門徒であって、船問屋でもあり、米穀やその他の雑貨を取扱っている商人にみうけられた。倉庫に案内され秘蔵の棚包されてある梵鐘を指さしながら「早く西派の寺を建ててくれや……」という切なる望みに胸をうたれた。法惠はとにかく松前の専念寺を訪れて門を叩き住職某に寺院の可否と可能性につき、「いかにし

たらば……」と訊ねたが要領の得ない答えのみ、この訪れは空しいものであった。更に江差に歩をすゝめて出店の門徒や出稼の門徒の人々に会った。それらの人々も「早く寺なり道場くらいはほしい……。」と切望されていることを知った。江差より寿都、寿都よりオタルナイに。足はサッポロの原野まで健脚にまかせて歩きに歩いた。

海は狂ったように北風は強く波は巣を喰み、陸地は原始林と雜木林深く、そして溶岩の丘に砂丘、湿地あれば熊笹と雜草の広野が続き、地の果つるところは此処かと思わせるほど。人影はまばらで陸奥の川内村の比ではない。法惠は口も交わさぬアイヌ人、口を利く元気のない和人に幾度も会った。口を利けば隠れる人、逃げる人の姿も見た。町はなく、たゞ荒涼たる丘から丘、野から野を歩いた。

ここに寺を建てて親鸞の教えを説くのは尋常のことではないと悟った。やゝ虚無から絶望の一歩手前まできた。僧法惠は天保12年から14年の初秋まで2年半は空しく過したような気がしたが、この2年余の漂泊は試練であり「川内村願乗寺に帰り母の諦子とよく相談して出直そう」と心に決めた。しかし心の隅には極めて安易な平凡な生活に入ろうかという気持ちもあったが、夢をもつ青年に立ち帰った。

（つづく）

お詫び

当会会報 1616 (59年2月28日発行)に掲載した「新春座談会」記事について関係者より厳重な抗議を受けました。内容は一部係争中の事件に言及しており、それを不用意に会報に取り上げたことは真に申し訳なく、深く反省しお詫び申し上げる次第です。

(当会)

=文化財保全基金

(町並み基金)について=

当会の内部に「文化財保全基金」を設けて3年になります。将来の法人化を考えて踏み出したもので、これ迄道補助金相当額、チャリティー益金とうを積み立ててきましたが今一歩積極的に基金造成を計るため、当会と東邦生命保険相互会社との間で代理店契約を結ぶことを考えております。これが実現しますと代理店収入は、すべて基金に繰り入れられます。会員の皆様ばかりでなく、ご家族、ご紹介知人も対象となりますので、是非この制度が生かされます様特段のご協力をお願いします。なお、詳しい事は下記にご一報頂ければ幸いです。

*今田会長(041)亀田本町32-43☎42-5174番

*工藤事務局長(040)五稜郭町43-9

五稜郭タワー内51-4789番

=町並み基金の原点ナショナル・

トラストを考える=

今、当会が進めている運動の一つ「文化財保全基金別名、町並み基金は斜里の「しれとこ100m²運動」小清水の「オホーツク村づくり運動」、小樽の「ロフト基金」と同じ考え方で立つ運動です。これらの大きな特質はイギリスの「ナショナル・トラスト」を視野に入れ、そこから運動のヒントや知恵を学んでいる点です。すでにご存知のことだと思いますが今一度ナショナル・トラストを考えてみたく…。以下の文章は一昨年しれとこで開催されました「日本におけるナショナル・トラストを考える」全国ゼミでの木原啓吉教授(千葉大学)による講演の一部です。ナショナルとは国家と言う意味ではなく国民のために国民自身の手で価値ある環境を保護するトラスト「国民信托」に当たります。1895年、弁護士のロバート・ハンター卿と婦人社会運動事業家オクタビヤ・ヒル女史、キャノン・ローンズリー牧師の3人の話し合いで生まれました。イギリスでは産業革命が世界の工場と言われて国運が進展したわけですが、一方工業化によりイギリス国民の誇りとする歴史的環境と美しい自然環境がこわされるという事態に直面しました。この儘の状態でいたら取りかえしのつかぬことになると言うので上記の3人により運動がはじめられました。発促当初は14世紀に作られた茅葺の家とか小さい牧師館の買いとり運動でしたが今や土地は大阪府の面積に匹敵する45万6千エーカー。

美しい海岸線180km、庭園500カ所、歴史的建造物200を越えるイギリスにおける民間として最大の大地主になっています。これらの勝れた国民の財産は100余万人の会員が1人年額10ポンド(約4,800円)身銭をきってなされる自発的な寄付で取得されました。しかも「1人の人が1万ポンド払うより1万人の人が1ポンドずつ」をモットーにしています。資産目録では先史時代からローマ時代の遺跡をはじめ古城、教会修道院、農家の納屋、公園、森林、水車小屋、草原、集らくななど様々なものがあります。詩人ワーズワースの家、政治家チャーチルが住んでいたロンドン郊外チャートウェールにある邸宅はチャーチルがまだ元気な1946年第2次世界大戦後チャーチルの名声赫々たる時、自分が亡くなったら、この家をトラストに寄付するという事に対し友人がござって家の周りの上地79エーカーのお金を出して買いとりチャーチルの死後これらのすべてが寄付されました。劇作家バーナード・ショーが住んでいた家もバスでロンドンから1時間余の所にあり、彼の晩年の名作をいくつか書いた家です。この邸宅も彼の生前1944年にトラストに寄付し移管した後、6年間ここに住み、この建物で94歳の生涯を終えています。イギリスのナショナル・トラスト運動の根底を支えたのはイギリスの国会がいくつかの特権を保証したことだとされています。政府は特別な資金援助をしないのが原則ですが、ナショナル・トラスト法を制定し、その財産は譲渡、分配、抵当化が禁止され、又財産をナショナル・トラストに提供する場合は相続税などが免除され、しかも家族はその建物の中で生活することが認められています。云々……と講演はまだまだ続きましたが、会報の字数制限で一部分のご紹介でおわります。

さて我が国の環境庁では、イギリスのこの制度を導入しようと、木原先生はじめ、この道の学識、研究者により検討を進めてきました。しかし、すでにしれとことか、岡山、妻籠宿の様に地方自治体や民間レベルで大きな成果をあげている実践例もあります。木原先生の講演の中でいく度も出てきたイギリス国民を函館市民に、国家、イギリスを函館市の言葉に置きかえて手さぐりしながら運動を進めてゆきたいと思います。

(文責 田尻)